

理学療法士国家試験対策における 学習動機づけの調整スタイルの類型化とその特徴

○成田亜希（白鳳短期大学）

宮本友弘（東北大学）

キーワード：国家試験，学習動機づけ

問題と目的

理学療法士養成校の学生は卒業年度の2月に国家試験の受験がある。本研究の協力校では、9月に本格的な国家試験対策が開始され、12月には多くの学生が、模擬試験で合格点を取り始める。国家試験対策における学生個々に合わせた学習支援の在り方を探るためには、学習動機づけを明らかにする必要がある。自己決定理論によれば、個人の中には、4つの動機づけの調整スタイル（外的調整・取り入りの調整・同一化の調整・内発的動機づけ）が存在し、速水（2005）は、それぞれの強度にも違いがあるとしている。このような調整スタイルによる個人差に着目し、それらの類型によって模擬試験成績及び動機づけの側面の自己調整学習方略、原因帰属、対処行動を比較し、学習支援の在り方と課題を検討した。

方 法

調査対象・手続き 3年制の理学療法士養成校に201X年～201X+2年に入学した122名を対象に最終学年の12月に模擬試験を実施した直後、質問紙調査を行った。なお、本調査は白鳳短期大学 倫理委員会の承認を得て実施した。

調査内容 (1) 学習動機づけ 速水ら（1996）が自己決定理論に基づき作成した動機づけ尺度（28項目）を修正して使用。(2) 動機づけの側面の自己調整学習方略 伊藤（2014）の情動的な学習方略（7方略）を基に質問項目（14項目）を作成。

(3) 勉強の出来具合に対する原因帰属 Weiner（1979）の3次元モデルに基づき速水（2005）が作成した6項目を使用。(4) 対処行動 テストに失敗にした場合、どのように対処しているかを速水（2005）が作成した9項目を使用。回答は5段階評価とした。

結 果

学習動機づけ尺度の4つの下位尺度得点を使用してクラスタ分析（Ward法）を行った結果、デンドログラムから3クラスが妥当と判断した。各クラスを外的調整・取り入りの調整が高い「統制的動機づけ群」、同一化の調整・内発的動機づけが高い「自律的動機づけ群」、すべての調整スタイル

が低い「低動機づけ群」と命名した。Table1は、各群の有意差が見られた尺度の記述統計量を示したものである。なお、動機づけの側面の自己調整学習方略は、14項目を主因子法・Promax回転による探索的因子分析の結果から気持ちの調整、やる気の喚起、学習方法の工夫と命名した下位尺度を構成した。群を要因に分散分析を行った結果（多重比較はBonferroni法、5%水準で実施）、模擬試験成績では、自律的動機づけ群が統制的動機づけ群よりも有意に高かった。動機づけの側面の自己調整学習方略のいずれの下位尺度においても、自律的動機づけ群や統制的動機づけ群は、低動機づけ群よりも有意に高かった。原因帰属では、「努力不足」、「運の悪さ」で、低動機づけ群が自律的動機づけ群よりも有意に高かった。対処行動では、「次の新しい目標を設定」で、自律的動機づけ群や統制的動機づけ群が低動機づけ群よりも有意に高く、「今回の失敗は重要なことではない」で、統制的動機づけ群が自律的動機づけ群よりも有意に高かった。「できなかった所を先生に尋ねる、本で調べる」「失敗の原因を考え改める」においては、自律的動機づけ群>統制的動機づけ群>低動機づけ群の順で有意に高かった。

Table 1 諸変数の平均 (M) と標準偏差 (SD)

		統制的動機づけ群 ($n=58$)		自律的動機づけ群 ($n=48$)		低動機づけ群 ($n=16$)	
		M	SD	M	SD	M	SD
模擬成績	模擬点数	189.17	14.81	198.48	18.68	186.50	30.23
動機づけの側面の 自己調整学習方略	気持ちの調整	13.47	3.43	13.72	3.87	9.28	4.81
	やる気の喚起	14.26	3.17	14.11	3.03	11.44	4.80
	学習方法の工夫	15.09	2.68	15.67	2.58	12.50	4.05
原因帰属	努力不足	4.10	0.81	3.76	0.85	4.39	0.78
	運の悪さ	2.67	1.02	2.33	0.92	3.17	1.25
対処行動	次の新しい目標を設定	4.09	0.92	4.39	0.65	3.11	1.23
	今回の失敗は重要なこと ではない	2.45	1.13	1.91	1.05	1.78	0.81
	できなかった所を先生に 尋ねる、本で調べる	4.00	0.70	4.39	0.65	3.28	0.89
	失敗の原因を考え改める	3.90	0.91	4.41	0.62	3.33	0.97

考 察

以上のように、3つの群には学習への取り組みに関して固有の特徴があることが分かった。そうした特徴に応じた指導が必要である。特に、統制的動機づけ群には、回避的な対処行動にならないよう、問題焦点型の対処行動を指導し、低動機づけ群には、動機づけの側面の自己調整学習方略の使用を促し、動機づけを高める学習支援が必要であると考えられる。